

仲間とのつながりを大切にする体育の授業づくり ～「アルティメット」(ゴール型)の実践を通して～

富本 浩史

はじめに

体育科は、「好き」と答える子供が多い教科であると言える。その背景には、運動することが楽しいと感じる子供が多いからだと予想できる。身体を動かして学ぶ教科である体育科は、楽しみながら学習を進めることが大前提であるが、楽しいだけではない。教師は、「楽しく学ぶ」ということを意識しながら授業を進めていく必要がある。そのために、①運動技能の向上が見られる授業 ②思考場面が保障されている授業 ③学習の場が保障されている授業 ④全員参加が保障されている授業を大切にしていきたいと考えている。

また、学習内容は、子供の学習へのつまずきから発生する必然性のあるものでなければならない。学びに必然性があることで、子供たちは「どうすればできるようになるのか」と主体的に学びの世界に入り込むことができる。子供の実態に即し、運動が苦手な子供に配慮しながら「できる」「わかる」が子供たちにとって近いものである、もしくはその運動と関わる中で近いものになっていく教材設定が大切である。

以上のことを踏まえ、学習を進めていくことで運動することが得意な子供もそうではなく、苦手な子供も「楽しく学ぶ」ことができると考えている。

「子供とつくる学び」について

「子供たちがどのように学ぶか」を大切にしたい内容の一つとして、私は子供たちに『体の動かし方』を意識させたいと考えている。どのように動かせばよいのか、体のどの部分に力を入れればよいのかな

どを子供たちが考えることで「できる」「わかる」により近づいていく。また、『リズム』や『タイミング』も大切にしている。どの運動にもリズム感やタイミングは必要である。1、2、3のリズムで投げることやタイミングよくボールを離すなど自分に合った『リズム』や『タイミング』を子供たちに考えさせていくことが必要である。

他にも「つながり」を子供たちに意識させていきたい。子供たち同士のつながりを通して「仲間とともに高め合う態度」を養うことや「これまでの学習と結びつける」ことで、一過性で終わらない連続的な学びを保証することができるからだ。そのために、「する」「みる」「支える」「知る」の観点を大切にスポーツとよりよく関わる工夫を考えていかなくてはならない。

「アルティメット」の実践

アルティメットは、フライングディスクを使用した1チーム7人制の競技スポーツである。フィールドの両端にゴールエリアがあり、この中で、ディスクをキャッチすると得点となる。ディスクを持って走ることはできず、パスをつないでいくことで得点に結びつける。フィールド内でパスが繋がらなかったときやディスクが地面に落ちたときは攻守交代となる。

本単元でのアルティメットのルール

- ①ゲームには1チーム4人が出場する。(出場しない子供は分析シートの記入)
- ②試合開始はゴールエリアからスローインを行う。
- ③守備チームはゴールエリア内で守備をしてはいけない。

アルティメットの最大の教材価値はディスクを相手に捕られないようにパスし続けなければいけないことだ。このことからボールを持っていないときの動きをより効果的に養うことができると考えた。

単元の流れ

第1時：ルールを知ろう

アルティメットのルールを子供たちに説明し、実際にディスクを投げたり、捕ったりする活動を行った。両手で上下から挟み込むように捕ることを全体共有することで子供たちに意識させるようにした。すると、体の正面に来たディスクに対して子供たちは落とさずに捕ることができていた。しかし、実際に子供がディスクを投げてみるとはじめはまっすぐに飛ばないことが多かった。「どうすればまっすぐに投げることができるのか」を子供たちに考えさせたかったため、ディスクを『どこまで投げることができるか選手権』を行った。この活動により「上に

投げては遠くへ飛ばない」「地面と平行に投げればまっすぐに飛ぶ」

「一歩片方の足を踏み

出して投げると遠くに飛ぶ」などの意見が子供たちから出てきた。



『どこまで投げることができるか選手権』

第2時：ディスクに親しもう

ここでは、「コーディネーション運動」を子供たちに紹介した。この「コーディネーション運動」は仲間とのつながりや学習のつながりを子供たちが意識して取り組むことができる手立てとして活用

した。内容は①セレクトキャッチ ②ナンバリングパス ③ボール運び ④鳥かごとした。この中からチームに必要な力は何かを踏まえて1つを選び、活動に移った。



『鳥かご』

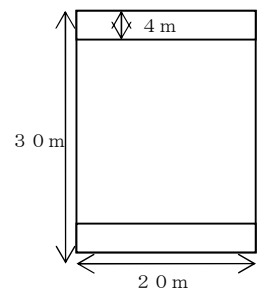


『ボール運び』

その後、3対1でのゲームを行った。子供たちは前回の学習で学んだねらったところに投げるために「地面と平行にして投げることを意識して取り組んでいた。また、「風の影響を大きく受けにくい」「キャッチしやすい」などの理由から「ボールを持っていない人ができるだけ近寄りパスをもらう」という考えも生まれていた。3対1ではそのようにつないでいくことで得点を取ることができている様子であった。

第3時：パスをつなぐポイントを見つけよう

この時間からは、4対2でのゲームを行った。前時の3対1とは違い、敵が一人増えることでパスが通りにくくなった。短いパスでつないでいこうとしたことで味方の動きが少なくなり、相手チーム



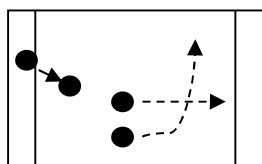
『コートの広さ』

にディスクを当てられてしまうからであった。コートの手端を使わずにプレーしていることが目立っていたため、「ディフェンスにディスクを当てられないためにどうしたらいいのだろう」という問いを立て

てた。子供たちからは「相手のいないところへ移動すること」「速いパスを回していくこと」などの意見が出た。しかし、なかなかゲームの中で意見通りの動きを生み出すことが難しい様子であった。そこで子供たちにあらかじめ用意しておいた3つの作戦を提示した。

作戦1

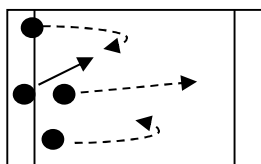
「まっすぐ移動する人」と「右から横切る人」で役割を分け、フリーになることで、パスをもらう作戦。



『作戦1』

作戦2

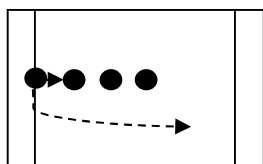
両端の二人がまっすぐに走ってから戻ってパスを受ける作戦。ボールを戻す概念を養うための作戦とした。



『作戦2』

作戦3

縦1列に並び、パスを出せば一番前に走り出す作戦。敵を追い抜かず概念を養う作戦とした。



『作戦3』

これらの作戦から選ぶ、または応用することをテーマに試合を行うことで少しずつ動きが変わっていった。

第4時：攻め方のポイントを見つけよう（本時）

ボールを持っていない子供は、前時で学習した「走り出す」ということを意識しながらゲームを進めていた。しかし、パスを出すタイミングが難しい様子で、走り出したタイミングでパスを出すことが

できていなかった。ピポットを使い、スペースを生み出そうとする子供もいたが、なかなかパスを出すことができず、ミスをして攻守交替となることが多かった。その中で、「どうしてパスがなかなかつながらないのだろう」という問いを立てた。意見を出し合う中で、「ピポットをしている時間の長さがディフェンスを集めてしまっている」という課題にたどり着いた。このことを踏まえ、ゲームを行っていくとより速いパスを意識するようになった。また、新しい動きも生まれてきた。それは、動きながらディスクを捕ることである。前回の授業でも少し出た動きではあったが、意図的に動いている様子が見られた。また、走り出しと同時に人のいないところへ大きくパスを出し、空いているスペースでディスクを捕る動きも出てきた。「人にディスクを合わせる動き」だけではなく、「ディスクに人を合わせる動き」も生まれてきたことでより子供たちの声かけも今まで以上に多くなった。授業の終わりには、「もっと多くの作戦をチームで作ると得点につながりそう」という意見も出てきた。

第5時：新しい作戦を立てて得点を多く取る方法を考えよう

第6時；第2回 5Eオリンピック大会

子供たちはいくつかの作戦を組み合わせてゲームに臨んでいた。分析シートや作戦ボードを上手に活用し、チーム内で密に話し合いながら取り組むことができていた。作戦がうまくいかなかったときには自分たちで何がいけなかったのかなどのお話し合いを進めている姿が見られた。

作戦の多くは移動しながらパスをもらうものであった。小さくパスを回しているところから一人が移動し、ディスクを大きく展開する場面も見られた。驚いたことは、パスをつないでいく速さであった。次々にパスを回していき、ゴールエリアまで近づく

チームはやはり強かった。5E オリンピック大会の決勝ではどちらのチームも展開が速かった。

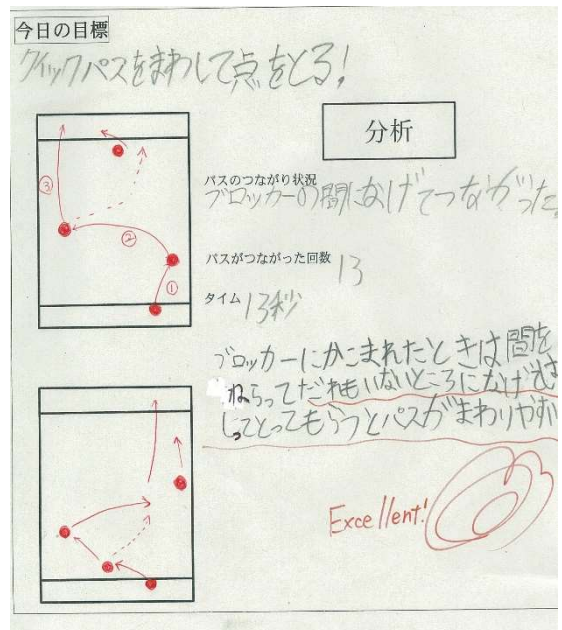


授業を通して

子供たちから「ディスクに人を合わせる動き」の考えが出てきたことは大きな成果であった。また、分析シートを活用したことで子供たちの考えが広がった。分析シートには、「パスのつながり状況」「パスのつながった回数」「タイム」を記入するようにした。ストップウォッチで時間を計る活動を取り入れることで速いパスが効果的であるという考えが出てきたのだと考えている。

アルティメットは、ボールを持たないときの動きを身に付けさせるために優れた教材であると感じた。また、この学習を通して子供たちは「つながり」を意識し、友達との関係がより密になったように感じる。運動が苦手な子供への声かけも様々な場面で見られた。特に「ナイスパス」や「ナイスキャッチ」という声が授業中、響き渡っていたことが印象的であった。

自分たちの動きを客観視しながら分析し、練習や作戦につなげることができた。今後は、この学習で身に付けた動きを子供たちが他のゴール型種目にも生かすことができていると感じている。



『子供が記入した分析シート』

